

# 今後新たに行う取組について （②家庭における科学コミュニケーション）

文部科学省科学技術・学術政策局人材政策課

# 家庭における科学コミュニケーション促進

## ○基礎科学力の強化に関するタスクフォース(議論のまとめより)

### 4. 基礎科学力強化に向けた対応策

#### (5) 社会全体で科学を文化として育む

#### ①科学に関する国民意識の向上のための機運の醸成

#### 【平成30年度以降速やかに取り組むべき事項】

- ✓ 子供が対象であることが多い実験教室等の活動に**大人が参加しやすい**機運を醸成するとともに、**家庭における身近な科学コミュニケーターである保護者の科学コミュニケーション活動をより一層支援**するため、親子、大人向けの実験教室、コンクール等を含む科学コミュニケーション活動に対して表彰すること等を検討する。

# 20代以降の国民の科学コミュニケーションに対する受け止めの傾向

## ○6割程度の国民が科学技術への関心と理解を深める機会や場が十分にあると思っていない

「科学技術と社会に関する世論調査」では、30代の61%、40代の59%が「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答

## ○家族や友人との会話は、科学技術に関する情報の認知経路として(マスメディアとは比較にはならないものの)、有力な方法の一つである一方科学館は認知経路として認識されていない

上記世論調査において、テレビ(87.1%)、新聞等(58.8%)、インターネット(21.8%)、ラジオ(12.2%)、家族や友人との会話など(10.1%)、書籍(9.2%)、企業の宣伝等(5.4%)、科学館・博物館(4.3%)の順となっている

# 親世代(20代以降)の科学コミュニケーションに対する受け止めの傾向

図2 科学技術に関する情報の認知経路

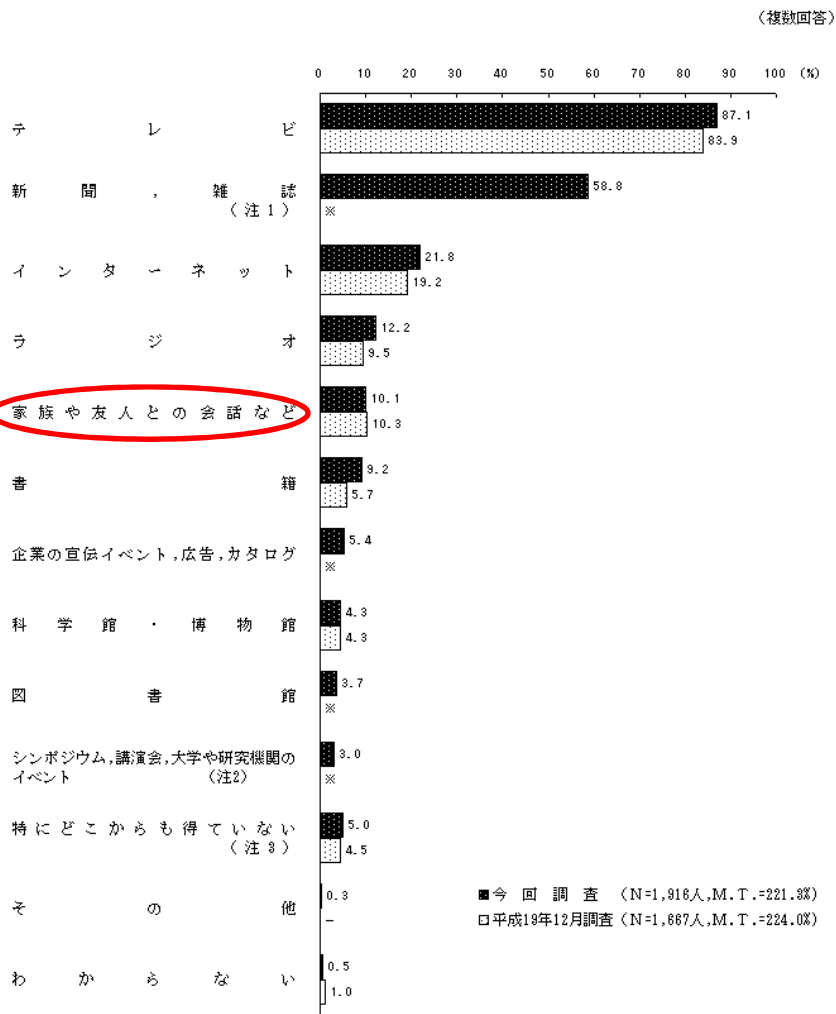
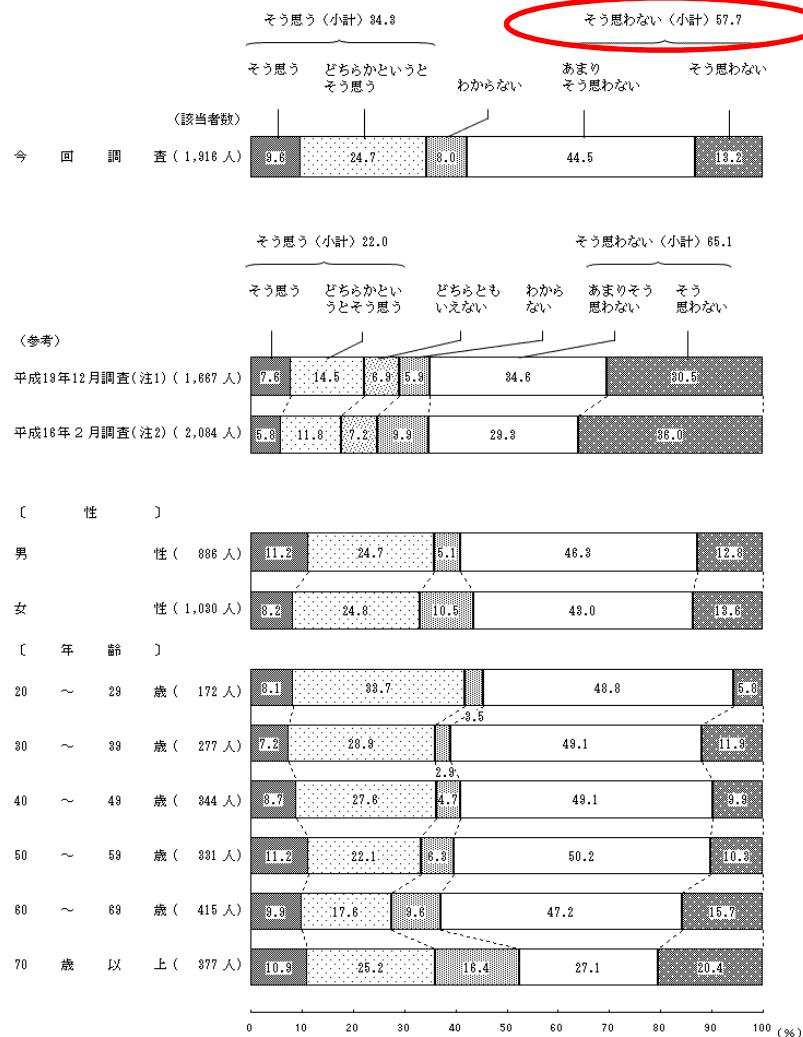


図3 科学技術への関心と理解を深める機会や場は十分にある



# 科学館における一般、親子を対象とした活動の傾向

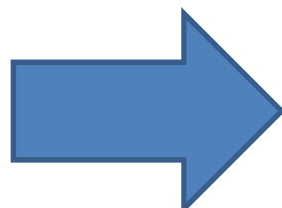
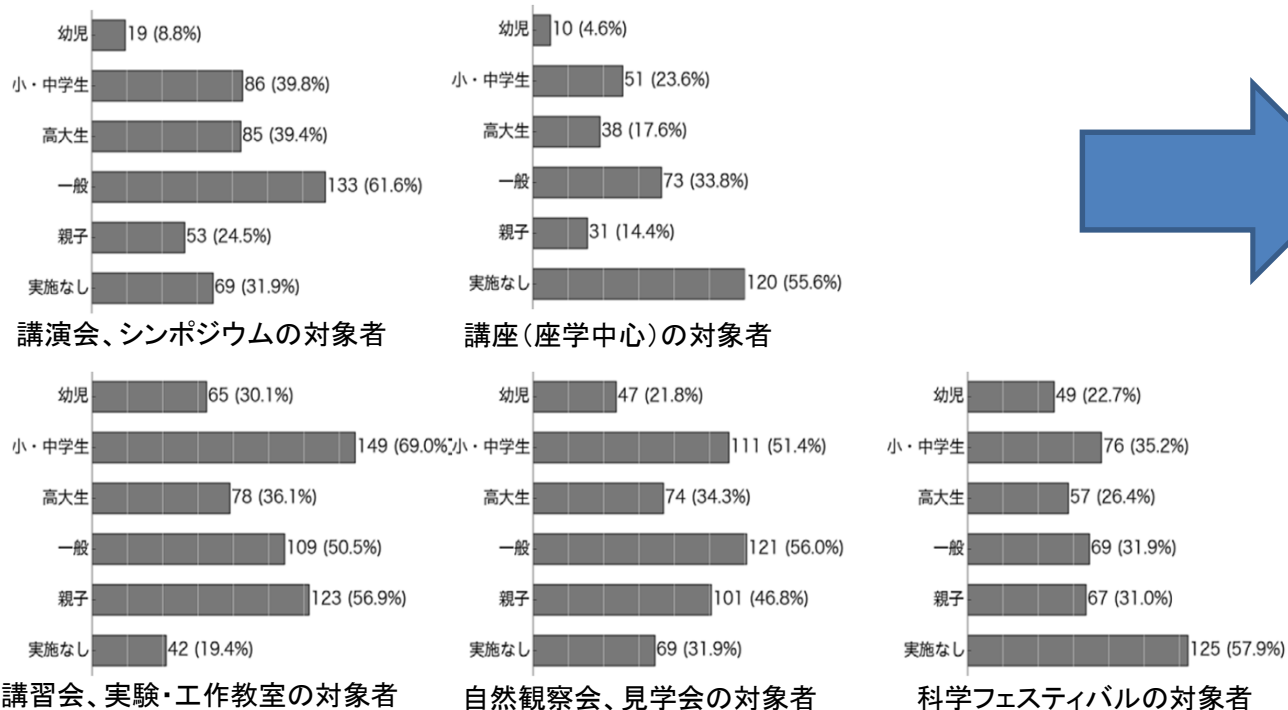
## ○9割以上の科学館で親子対象のイベントを実施

文部科学省が実施したアンケート（平成29年実施）結果では、40館中37館が親子を対象としたイベントを実施している旨回答

## ○イベント数ベースでは、2割程度の実施数

上記アンケートの40館における年間イベント数5,369件に対して、親子を対象としたイベント数は1,190件（22.2%）

## ○科学フェスティバル、実験教室、自然見学会といったイベントが親子対象となる割合が高く、同時に小中生対象の割合が高い



子供が参加するイベントに連れて行く親、という姿があるのではないか

左図：「科学系博物館におけるサイエンスコミュニケーション活動調査研究報告書」（平成27年3月日本サイエンスコミュニケーション協会）より引用

# 大人世代、親子間の科学コミュニケーションに関する問題意識

- 家庭、家族間における科学コミュニケーションは重要
- 普段、子供が主体となりがちであり、保護者(大人)主体となる場面を増やしたい
- ただし、日頃仕事、家事等で忙しい中、負担感のある「新たな取組」は難しいのではないか(新たな取組が難しい「そこまで関心が深くない層」への訴求をしたい)
- 一方、現在のSNS等の使われ方は、「つながり」だけでなく、自己表現の場としての側面もあり、新たに科学技術に関する表現の場を設ける効果はあるのではないか



- 科学技術週間の体験記(映像、写真、文章問わず)  
募集する「科学技術週間」のとらえ方に検討の余地はあるが相乗効果は得られやすいか。ただし、「科学コミュニケーションは常に行われている」と考えた場合、対象が狭くなってしまう恐れ
- こどもの自由研究や工作+家族の「ひとこと」を募集  
対象が限られているが、子供を持つ家庭で良くある一コマであり、多くの人が経験していること



より問題意識を反映した良い取組はないか？